フォーラム・セミナー報告

第7回 FDフォーラムを開催しました

日時：6月23日(土)13：00～14：30
場所：第２学舎２号館　C303教室

大学教育における学生自身の持つ「教育」力の1つとして、ティーチング・アシスタント（以下TAとする）の活用が本学でも行われている。これまで、学部独自のTAの運用に加え、「試行的TA制度」が2005年度より発足しCTLが主体となって全学的に運用されてきた。それを、本格的なものにすべくCTL内部でワーキンググループを立ち上げ検討を進める中、時宜を得て、この領域で先進的な研究・実践をされている日本大学の北野秋男教授に「大学教育の質的向上を目指して−TA・SA制度の有効活用−」と題する講演をいただくことができた。

北野教授による講演の様子

北野教授は早くからアメリカにおけるTA制度の研究、日本全国の大学のTA運用について訪問調査等をされており（その成果は編著書『日本のティーチング・アシスタント制度―大学教育の改善と人的資源の活用（東信堂）』に結実）、当日も豊富なデータをもとに有益なお話をいただいた。

まずは、大学教育そのものが質的に改善されていくことの必要性、高等教育の今日の在り方を概観され、豊富なデータを背景に日本のTA制度の現状を詳説いただいた。その後、ご所属の日本大学文理学部におけるTA制度のポイントを、ステューデント・アシスタント（以下SAとする）の活用も絡めて説明された。ここでは詳細な「規程」等の紹介もあり、きわめて実践的な内容であった。さらにTA/SAを使った授業モデルの紹介をいただき、実際に授業の中で活用する際の問題点なども指摘いただいた。

本学の「学生の教育力活用」制度の構築に向けて力強くエールをいただき、大変実り多い講演会を締めくくった。

（教育開発支援センター長　田中俊也）

第8回 FDフォーラムを開催しました

日時：11月7日(水)16：20～17：50
場所：第２学舎２号館　C507教室

11月7日（水）、東京工芸大学芸術学部教授の大島武先生を講師としてお招きし、『コミュニケーション再考−分かりやすい「伝え方」−』という演目で講演していただきました。コミュニケーションやプレゼンテーションなどのパフォーマンス研究をご専門とされ、ベスト・エデュケーター・オブ・ザ・イヤー最優秀賞を受賞された経験のある氏ならではの軽妙な語り口で、教職員と学生とが相半ばする独特の編成の聴衆を1時間半飽かすことなく、重要なポイントが自然に胸に落ちるお話をされました。その素晴らしいお話を文字で再現するのには限りがありますが、ここに要点をまとめておきます。

その一。コミュニケーションは誤解の連続であることを正しく認識しておくこと。コミュニケーションとは、即ち「記号」のやりとりなので、その意味づけ、解釈に幅や差異があるのは自然なことと捉え、そのズレを可能な限り軽減するように心を配る必要がある、ということです。

その二。わかりやすく話すこと。大島氏はC.キャブリスの「錯覚の科学」や久垣啓一の「図に描けない話はするな」を引用しながら、わかりやすく話すための八箇条とプレゼンテーションマインドの重要性についてお話されました。八箇条とは、①大枠から話す、②具体的に話す、③話を構造化する、④自信を持って言い切る、⑤相手の反応に合わせゆっくり話す、⑥相手の土壌に立って話す、⑦相手に馴染みのない言葉は使わない、⑧タイムマネジメントを常に意識する、です。教育職員にも事務職員にも、そして学生にとっても大切なことであり、実践を目指すべきだ、目指したいと思われる内容でした。

その三。コミュニケーション上手になるために必要なポイントをおさえておくこと。コミュニケーションを豊かに、潤滑に展開するためには話す力（表現する力）だけではなく、聞く力も必要です。コミュニケーションの相手に自分が話を真剣に聞いていることを伝え、話の内容への賛同の可否にかかわらず受容する意思・姿勢のあることも伝え、メッセージを交換する頻度を高めることが重要であり、非言語コミュニケーションをも十分に駆使する必要があるとの指摘は誰もが首肯できることでした。

94名の参加者のうち、54名がアンケートにお答えいただきました。その一部を紹介します。講演会に参加した理由で最も多かったのは「テーマに関心があったから」で、96.3%を占めていました。テーマの設定が適切であったと言えるでしょう。講演内容が役に立ったか否かについては、「大いになった」が87.0%、「少しなった」が13.0%であり、役に立たなかったという評価は皆無でした。この数値からも内容が素晴らしかったことをうかがい知ることができると思います。

教育開発支援センターでは以後もみなさまが関心をお持ちのテーマで講演会を開催していきたいと考えております。ご要望等があれば、是非ともセンターまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。

（教育推進部　三浦真琴）

大島教授による講演の様子